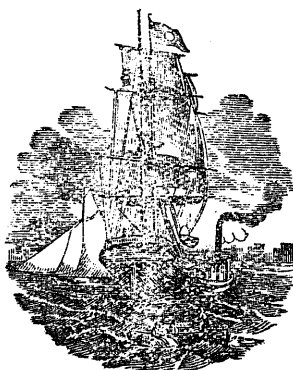


等らの目めと鼻びなと耳みみと口くちとが今いまの目めと鼻びなと耳みみと口くちとの如ごとくにあらざれば、天地てんちは全然ぜんぜん異ことりたるものとして吾人われびんに對たいするであろー(つゞく)



朝あさも秋あき

夕ゆふも秋あきの

あつまかな

史傳

黒澤登幾子

下村三四吉



本年ほんねん一月いちがつの本誌ほんし 第二卷だいに第一號だいいちがう、に余よは津崎矩子つさきのりこの傳でんを記述きじゆつし始めはじめ、その冠首くわんしゆに、「……望東尼ぼうとうにと相比あひひすべきもの更に二人にんあり。その一人ひとりは京都きやうとの津崎矩子つさきのりこにして、他たの一人ひとりは常陸ひたちの黒澤登幾子くろさわとよきこなり、京都きやうとを中央ちゆうちゆうとして、一ひとは西國さいごくに在あり、一ひとは關東くわんとうに出いでたり、亦奇またきとすべし。この二人にんの事蹟じせきは、その曲折きよくせつもとより各おの同じからずといへども、勤王きんわうの志しに至いたりては則すなはち一ひとなり。既すでに望東尼ぼうとうにを傳でん

したる上は、他の二人をも説かざるへからず。よ
りて、ここには、先づ津崎矩子の事蹟を述べ、然
る後残れる一人に及び、余が記述の本意を始終せ
んと欲す。」といへり。矩子の傳も亦先々月の誌上
にて終結せり。本題の黒澤登幾女は、即ち余が記
述の約を果すべき「残れる一人」なりけり。

登幾子は修驗者黒澤莊三郎の女にて文化三年十
二月、常陸國東茨城郡錫高野村に生れぬ。方には
れ水戸藩近世の大英物藤田東湖の生れしと同年な
り。そも、修驗者といふは、修驗道を修むる
もの、名稱なり。修驗道は、もと佛教の一派にて
宇多天皇の寛平年中に歿しける醍醐の僧聖寶の創
めたるるところにして、加持祈禱を行ひ、また神に
も事ふるわざをもなし、佛教神道の兩方に關係せ
るものなり、その徒は、半ば頭髮を剃りかろし、

篠掛、袈裟、頭巾を着け、大刀を帯び、金剛杖を
つき、法螺を吹きて、山河を跋渉し、露宿の苦を
嘗めて修行す、よりて亦山伏とも云ふ。かゝれば
修驗者たるものは、大かた、ひとわたりの讀み書
きの道に通じ、中には學問に深きものも少なから
ざりき。登幾子の父たる莊三郎につきては、吾人
不幸にして、その詳しき事蹟を知るに由なく、且
つ登幾子のまだ幼き間に歿しければ、登幾子の彼
れより受けし感化は、割合に少なかりしならんと
思はる。母なる人の素性に關しても、ここに語る
べき材料を得ざれども、その確固たる志操を有せ
る人なりしことは、なほ後文にあらはれぬべし。
莊三郎の歿してより兩三年の後、寡居の母は、
同村の新介といふものを迎へて入夫となしぬ。新
介は人となり氣節を尙び、志操あり、また學問を

好み、村内の子弟を聚めて之を教授せり。登幾子も家庭によりて、繼父の薰陶を受け、國學を修め最も和歌に長ぜり。登幾子が後來に於ける尊王憂國の思想操持は、この間に涵養せられたるもの、蓋し極めて大なるべし。

吾人は、更に登幾子の郷里たる錫高野村につきて注意せざるべからず。同村は、水戸の西北に在りて、水戸徳川家の藩封に屬せり。水戸藩にては所謂水戸學なるものあり、水戸學の精神は、倫道を明かにし名分を正しふするに在り。光國公修史事業を始められてより、尊王の大義は、ここに發揮せられ、近くは藤田幽谷(東湖の父)同東湖、及び會澤正志等之を繼紹論述して、天下の志士を鼓舞作興しけり。明治維新の大業の發動は、實にこの水戸學の方に存せりといふべし。光國公また

封内の節婦孝女を旌賞すること一にして足らず、その奨勵せるところ見るに足れり。水戸の風尙の影響は、海内を風靡せり、ましてその封内に屬せるもの、豈その感化を受けずして止みなんや。敏慧の素質を有せる登幾子は、新介の誘掖によりて學業日に進みしが、彼が年頃に達せるに及びて、繼父は亦重き病にかゝりて、他界の人となり。懇に葬送を修め、ほど經て、媒灼する人ありて、同國久慈郡小島村の鴨志田彦藏といふに嫁しぬ。子三人までまうけたりしが、數年の後、更に夫の死歿の憂さめにあひぬ。よりて、その幼女を携えて、里方に歸り、七十に近き實母の孝養に慮りなかりき。

(つづく)

荷明ニ大義ニ正ニ人心、皇道奚患レ不ニ興起、

斯心奮發誓神明

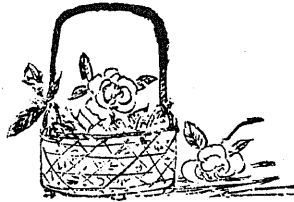
古人有云弊而已

(藤田東湖)

梓弓春のあそびのたはふれも

踏みなすがへそものゝふの道

(同 右)



暴風

文苑



赤堀信成

野分せしあさちか中にこほろぎの

あはれなくなり細聲にして

山崎房吉

地の上に咲きしあさ顔いかばかり

恐ろしかりし夜半の野分は

増山三雪子

柿の實のいろつく頃し野わきして

枝を空しく打ちてけるかな

小幡八重子

時のまに軒端のまつはたふれけり

いかに嵐のはげしかりけん

